

便利な時代になつた。写真や動画はデータとしてたくさん残しておけるし、いつでもどこでも見ることができる。若い時分にお世話になつた「写ルンです」やVHSはいまやレトロ商品として扱われる今日この頃。その半面、記録メディアの仕組みや残量の具合が傍目には分かりにくくなつた感もある。

四歳も半ばを過ぎた息子が「これ撮つておいて」と作りかけのレゴブロックの写真やたまたま見かけたテレビ番組の録画を頻繁にせがんでくる。困ったことに「絶対消さないでね!」などというものだから、どんどん記録が積み重なつて容量を圧迫してゆく。ある時、「どうせ見ないからもういいかな」と目の前で消去したら、「もう一回見たかったのに。あれじゃないと嫌なんだよ」と大泣き。小一時間もすれば忘れるだらうと高をくくつていたら、なかなかしぶとく、三日ほど思い出してはその都度、文句を浴びせ続けられる羽目に…。

本人いわく「全部忘れないの、いろんなことを覚えていたいの」と。ネット動画を見慣れた息子にとって、記録されずその場面を見直すことができないという状態は、自身の世界観の一部を欠損してしまつたかのように感じるのだろう。ちょっと大きめに言えば、息子は過去を喪失したことに绝望してしまつたのだ。現状、未来の不安よりも、まずは過去の執着の方が大きいようだ。

アラフォーの私はとて、将来的な先行きや身体的な衰えの方にこそ心搖れるとしても、息子のよう、日々の些細なことまで「全部覚えていたい」と

## 工藤量導

人は皆 いつの日か  
会えるくなるか知らない  
ボクから告げない愛がある  
ボクは見てるよ  
単純なことが空に満ちてる  
ボクらはとても複雑だから  
I say hello, I say goodbye  
もしも君がボクより先にいなくなつても  
歌つてあげる

I say hello, I say goodbye

(松陰ナ木 「hello, goodbye」 466)

OP 山川風

微

風

吹

動

するからこそ、上人は確固たる魔法のフレーズに寄る辺を求めたのだろう。

それは千五百年以上前に漢訳された『觀無量壽經』の経文にある「南無阿弥陀仏」の名号。現代まで一切変わることなく、たくさんの人々によつて幾多の願いが込められてきた聖句である。「わが名を呼べば必ず救い取る」と誓つた阿弥陀仏は、攝取不捨の精神すなわちあらゆる願いを聞き届けて忘れないことを自らに課した存在である。だからこそ、怠ることなくむせ返るような愛で私たちの想いを受け止め続けてくれる。「全部忘れたくない、いろんなことを覚えていていい」という誓いが人知を超えた力で大真面目に敢行されているのだ。

もし当時から今に至るまで、この六文字にハッシュタグを付けることができたならば、はたしてどれだけの人々の願いが数え上げられ、どれだけの想いがそこに拾い集めされることになるのだろうか。おそらく並大抵のコンピュータの記憶容量にはおさまりきらない天文学的な情報量になつているはずだ。

人は皆いつどこで会えなくなるか知らない。大丈夫だろと油断して、告げるべき愛を伝え損なつた代償は小さくない。だからこそ他愛ない日常のいとおしさを刻み込むためのハロー・グッドバイ、一期一会の積み重ねが大事なのだ。忘れない想いを護るために、西空の彼方に浮かぶ無限大のクラウドに向けて、仮の名をよぶハッシュタグをあげ放つてゆこう。合掌 #南無阿弥陀仏

りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師。専門は中国浄土教、著書に『迦才『淨土論』与中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など。

いう純真な欲求はほとんど失われていることに気づかされた。いうなれば、日々のルーティンにはとんと関心が薄くなつてしまつてゐるということだろう。

あらためて考えてみると、息子の言う「全部」とは、眼耳鼻舌身意の感覚器官を通じて得られたあらゆる記憶のはずであり、それに対して、写真や動画で記録可能なのは全体の情報量からいえばほんの一部に過ぎない。とすれば、涙目の息子にかける言葉として「一瞬一瞬を大切にして心の記憶にしつかり残しておこうね」というのは模範的な回答候補のひとつだ。そうは思いながらも、わが息子にそのことを強弁できない自分がいる。そんなことは、私自身ができるないからだ。息子に向けた言葉はすべて自分にはね返つてしまふ。

数年前に読んだ西川美和さんの『永い言い訳』という小説に「愛するべき日々に愛することを怠つたことの、代償は小さくない」という印象的な蒂文があつた。この言葉にひどく感銘を受けたのは、それだけ思い当たる節があるからだろう。ひるがえつて息子は覚えておきたいという朴直な願いをあきらめず、「当たり前」の積み重ねでできあがつた大人の諦観を痛快にぶち破つてくれる。

法然上人が「池の水人の心に似たりけりにござりすこと さだめなければ」と和歌に詠んだとおり、私たちの心はいつも散り乱れて一向に定まる気配がない。雲が流れるように時間が過ぎ去つてゆく中で、つい大切なものを疎かにしてしまう性分なのだ。そんな不確かな、あてにできない存在であることを自認